

モダリティ表現と間主観性 —フランス語の副詞peut-êtreを事例に—

外国語学部/ヨーロッパ学科/フランス語圏専攻
岸本聖子

1. 研究目的

- モダリティが表す間主観性の概念を再確認
 - モダリティ副詞 peut-être を事例として、間主観性が対人配慮機能と密接に関わっていることを論じる
- フランス語の法助動詞 pouvoir には、根源的用法(可能、許可など)と、認知的用法(蓋然性)とがある。しかし、次の例のように<是認>のような認め方の意味効果が生じることもある。それはまた、副詞 peut-être についても同様である。

[遠距離恋愛のコミュニティーサイトのキャッチフレーズ]
La distance **peut** éloigner deux corps mais pas deux cœurs
≈ La distance éloigne **peut-être** deux corps mais pas deux cœurs (岸本 2018)
距離は二人の体を引き離すかもしれないが、二人の心は引き離さない

- (a) 陳述性にかかわる語用論的意味効果の問題である
 - (b) 間主観性の認知基盤となりうる共同注意の観点から議論可能 (岸本 2018)
- どのような点で間主観的かについて、詳細な検討を課題とした

2. 間主観性とは何か

- 間主観性の定義における二つの方向性: 発話現場指向なもの (Benveniste, Traugott, Tomasello) / 事態把握指向なもの (Langacker, Verhagen)
 - 現在、標石とされる Langacker と Traugott の subjectivity (主体化/主観化) の定義の違いと間主観性の定義への流れ
- Langacker: 事態を外から眺める(主客対立) vs 自己の状況埋没型(主客同一: 自己は言語化されない=自己を客体化しない)
- 主客同一的な捉え方 + 複数の概念化者を想定 (Verhagen) ⇔ 間主観性
- Traugott: 発話場面における解釈主体の語用論的推論で、3段階(読み込まれた含意が解釈として定着すれば、次の意味拡張の基盤となる)
- I 物理的世界→心的世界(⇨→テキスト連結機能)へのメタファー的推論、III 話し手の主観的な信念や態度へとトニミー拡張 ⇔ 一部は間主観化

<事態の言語化> (Langacker)
vs
<言表内容の解釈> (Traugott)

モダリティ副詞 peut-être には、<是認>のような事実的な事柄に対する話し手の認め方の提示、という語用論的意味効果を表すことがある
→ 本研究では Traugott の考え方を援用

- 意味拡張とその方向性: non-/less subjective → subjective → intersubjective (Traugott 2010)
- 間主観性の定義: [...] intersubjectivity in my view refers to the way in which natural languages, in their structure and their normal manner of operation, provide for the locutionary agent's expression of his or her awareness of the addressee's attitudes and beliefs, most especially their "face" or "self-image" (Traugott 2003) ⇨ Traugott の定義は「聞き手志向である、聞き手の存在重視である」と捉えられがちだが、この定義の後半部分によると、それは単にコミュニケーションにおける話し手と聞き手の対峙や結びつきというだけではなく、「フェイス」という聞き手の体面に関わる概念にまで踏み込んでいる

3. 間主観性の延長線上に捉えられる対人配慮機能

- a. Let us go, will you? ...will you? という表現も手伝って、単なる命令よりも聞き手への配慮が示されている
 - b. Let's go, shall we? 聞き手と結託して何らかの行為を行おうとする話し手の思い
 - c. Let's take our pills now, Johnny. Let's という表現をとるが 実際に行うのは聞き手のみ = 聞き手に高度に配慮? (深田 & 仲本 2008)
- 低
高
間主観性
- 山岡 (2016): Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論を援用し、配慮表現を「対人的コミュニケーションにおいて、相手との対人関係をなるべく良好に保つことに配慮して用いられることが、一定程度以上に慣習化された言語表現」と解釈
 - a. 明日は雨が降る **かもしれない**。<可能性判断> 非配慮
 - b. ここのラーメン、すごくおいしい **かもしれない**。<主張> 可能性判断の意味が主張緩和という配慮へと拡張される
 - c. 君は試合には勝った **かもしれないが**、実力はまだまだだと思ったほうがいい。<忠告> 可能性判断の意味はもはや無く、配慮に特化された表現
- 慣習化の結果として、当該の言語形式がもともと有する本来の語義が希薄となり、最終的には原義を喪失する (ibidem)

● モダリティ副詞 peut-être の場合

- a. Ils ne viendront **peut-être** pas. 彼らはおそらく来ないだろう。<蓋然性> 非配慮
- b. Vous n'êtes pas exempt de politesse, **peut-être**? 礼儀を欠いてもいいわけではないと思いますが? <挑発/皮肉> 配慮拡張 (FTAの緩和)
- c. Elle est **peut-être** belle, **mais** elle n'est pas très sympathique. 彼女は美人かもしれないけど、あまり感じが良くない。<譲歩 (命題は事実的)> 配慮特化

4. 間主観性の多様な現れ: フランス語のモダリティ副詞 peut-être を事例に

- 比較的容易に分類できる「非配慮」と「配慮特化」以外の例、つまり「配慮拡張」には、A. 話し手の発言が聞き手に受け入れられない可能性があり話し手の発話がFTAになるリスクを回避するものと、B. 話し手の発言が聞き手の消極的フェイスを脅かす場合にそれを回避するものがある。

A Il faut que je rentre **peut-être**, maintenant. Voyez comme c'est tard. <申し出> (Marguerite Duras (1958), *Moderato cantabile*, p. 62)

B [バーで、Paule という女性との歓談を楽しもうとしていた Roger が Simon に邪魔をされて] -Vous avez **peut-être** une autre table? dit Roger. <要求> (Françoise Sagan (1959), *Aimez-vous Brahms*, p. 28)

- 認め方の問題としての peut-être (譲歩・是認: 事実である当該事態を真正面から認めると自己の消極的フェイスが侵害される可能性があるため、それを回避するための自己防衛の手段)

[自分が軽蔑していた「大人」のようになってしまったことを認めざるを得ない場面で] [...] je ne sais pas voir les moutons à travers les caisses. Je suis **peut-être** un peu comme les grandes personnes. J'ai dû vieillir. <是認> (Antoine de Saint-Exupéry (1943), *Le Petit prince*, p. 423)

- 返答としての peut-être (譲歩・是認の一種として oui の代わりに: 同じく、自己防衛の手段として)

-Ce que vous me racontez n'a aucun sens, protesta Alice.

-**Peut-être**. Après tout, je ne suis qu'une simple voyante de fête foraine. <譲歩> (Marc Lévy (2011), *L'étrange voyage de Monsieur Daldry*, p. 62)

- 過剰さを打ち消す peut-être (trop と共起: 例文は <非難> を表すため、聞き手の消極的フェイスを侵害する可能性があるため、それを回避する)

-Vous allez arriver plus tard que d'habitude dans cette maison, vous y arriverez plus tard, **peut-être trop** tard, c'est inévitable. Faites-vous à cette idée.

<非難> (Marguerite Duras (1958), *Moderato cantabile*, p. 114: 下線は筆者)

5. まとめ

Traugott 流の間主観性の概念を発展的に捉え、対人配慮の観点から観察できるフランス語の副詞 peut-être の用例を4つに分類。話し手と対話者との関係の結びつきと、話し手と事実性との対峙のあり方について分析した。

主要参考文献

Brown, P. & Levinson, S. C. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge university press. / 深田智&仲本康一郎 (2008)『概念化と意味の世界—認知意味論のアプローチ—』研究社. / 岸本聖子 (2018)『モダリティ表現にまつわる事実性の意味論—DEVOIR, POUVOIR, SIの意味効果をめぐる—』弘学社. / Traugott, E. C. (2003), "From Subjectification to Intersubjectification", in Hickey, R. (ed) *Motives for Language Change, Cambridge University Press*, pp. 124-139. / Traugott, E. C. (2010), "(Inter) subjectivity and (inter) subjectification: a reassessment", in Davids, K., Vandelandotte, L. & H. Cuyckens (eds) *Subjectification, intersubjectification and grammaticalization*, Berlin, Mouton de Gruyter, pp. 29-71. / 山岡政紀 (2016)『「カモンレナイ」における可能性判断と対人配慮』in 小野正樹&李奇楠編『言語の主観性 認知とポライトネスの接点』くろしお出版, pp. 133-150.